

## 9. 風に乗って

各務原市立那加第一小学校

6年 安田 早希 平田 碧

↓

敦賀市立西浦小学校

6年 川端 健太

これは、ひたすら冒険し続けるたんぽぽのお話です。

時は、三月の終わりごろ。

「よいしょ、光がとどくのはもう少し上だったかな？ もうちょっと掘ってみよう」  
姿が変わったたんぽぽは、今までずーっと土の中で暮らしていました。外の景色など、まったく覚えていません。

「うわぁー。気持ちいいなぁ」

やっと外に出たのは、まだ朝の早い頃でした。

風になった頃、近くで子どもたちがサッカーを始めました。

グシャ。

たんぽぽは、サッカーボールでつぶれてしまいました。

「ぼくは、あきらめないぞ。大きくなったら絶対に旅をするんだ」

たんぽぽは、必死に起き上がりました。

それから一週間後のこと、たんぽぽは綿毛になりました。

「あれれ？ ぼくって、こんなにたくさんだったかな？」

そこで、たんぽぽは数をかぞえました。

「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち……。え、おかしいなぁ」

「こんにちは」

みんながいっせいに言いました。

「ぼくたちは、君の友だちだよ」

ヒュ～。

その時、風が吹きました。

すると、友だちの綿毛がひとつ、飛んで行きました。

「いい旅をしてくるよ」

そう言い残して旅立ちました。

プワ～ッ。

次の風で、残りの綿毛たちがみんないっせいに飛んで行きました。

「残るは、ぼくひとりだ。ぼくは、次の風で旅に出るよ」

たんぽぽは、次の風を待っていました。ところが、風はやって来ません。

「あれ、なかなか風が来ないぞ」

次の日、風はやって来たものの、その風は……嵐。

「せっかく風が来たのに、雨じゃ飛べないじゃないか。ひどいなぁ」

次の日は晴れ。嵐が通り過ぎた後の、気持ちの良い天気です。

「ぽかぽか陽気だ。風さえ吹いてくれればいいのにな」

ピュ〜。

「さあ、出発だ」

たんぽぽは、ようやく旅に出ることに成功しました。

「よし、ぼくに合った土地を探すぞ。途中で会った人に、いい場所を聞こう」

まず初めに出会ったのは、てんとう虫。

「てんとう虫さん、てんとう虫さん、ぼくに合う土地を知りませんか？」

てんとう虫は、答えました。

「たんぽぽの周りがいいですよ。とくに、棚田。静かでいいですよ」

「そうですか。ありがとうございます」

たんぽぽは、さっそく棚田を探しに風の流れにまかせて飛んで行きました。近くでバツタが遊んでいました。

棚田に着くと、たんぽぽは言いました。

「ここは、ぬかるんでいるなあ……。ここでは暮らしていけないよ。そうだ！ もっといい場所をバツタさんに聞こう」

たんぽぽは、バツタに話しかけました。

「バツタさん、バツタさん、ぼくの暮らしていけるいい場所はないですか？」

バツタはこう答えました。

「住むのにいい場所は、この中さ。静かで最高だよ」

しかし、たんぽぽは、

「こんなにぬかるんだ所で、暮らせるわけないですよ」

すると、バツタは、

「なにい？ この土地に文句をつけるだと？ そんなことは許せん！ そんなやつに住みよい土地など教えるものか！ 今すぐここを出ていけ！」

たんぽぽは、バツタに怒られ、風に流されるまま、旅を続けることにしました。もちろん、いい場所を教えてもらえなかったので、行くあてもありません。

と、そこに、ツバメがやって来ました。

「ツバメさん、ツバメさん……」

何度も何度もツバメに話しかけましたが、ツバメは、すごいスピードで、通り過ぎて行ってしまいました。

「ああ、どうしよう」

その時、とつぜん風が止み、たんぽぽは落ちてしまいました。

ポトッ。コロコロコロ……。★

一瞬にして、たんぽぽは広い見たこともない光景に驚きました。

そこは、空一面真っ青、小高い丘の上でした。そして全体が花しかありません。

一体ここはどこ？ 独り言のようにつぶやくと、その緑の原っぱの脇にたんぽぽを見下ろしてアザミが優しく微笑んでいました。

「アザミさん、ここはどこ？」

たんぽぽは聞きました。

「僕も綿毛になってさまよっていたら、いつの間にかこの丘にきていたんだ」

アザミはたんぽぽにそう言い、こう話しました。

「最初は僕、友だちと風に乗って旅をしようとしていたら友だちとはぐれて僕だけここに飛ばされたんだ。友だちもどこの風に乗って行ったかわからないんだ。綿毛になったからには近いうちに住む場所を決めて暮らさなきゃいけないんだ。君もそうだろう？」

そうだった。棚田までは覚えていたけど、そこでは暮らしていけないからどこか探していたんだ。たんぽぽはついさっきまでのバツタとの事を思い出していました。

ここは、ちょうちょやミツバチが楽しそうに飛び交い、花の花粉を忙しそうに運んでくれています。アザミもここでなら仲間を増やすことが出来ると思っていたのです。そんなアザミの気持ちを知ってか知らずか、たんぽぽもアザミたちと暮らそうと思い始めていました。

そんな時、風のようにツバメがやって来ました。

「あっ！ ツバメさん。ここにいたんだ。さっきは急いでいたのはここへ来るため？」

ツバメは羽を休ませながら、

「そうなの。ごめんなさいね。さっきは子供たちが迷うといけないから慌てていたの。やっと飛べるようになって旅に出ようとしていたのよ。そしてここまでたどりついたので」

こう言い、ツバメは新しい住み家に帰っていきました。

丘には高い木々が生い茂り幹の下にはすみれがじゅうたんのようにならんで咲いていました。

「アザミさん、僕もここで暮らしていい？」

たんぽぽはアザミに聞きました。アザミはクスッと笑い、

「僕に聞くことは無いよ。僕だってこれからだ。友だちの事を探さなきゃいけないがまずは住むところだ。よろしく！」

と、背の高いアザミは頭を下げました。

たんぽぽもアザミも風に身を任せ柔らかい土を探しました。そのまま落ち着く場所を見つけ、次に雨が降るまでじっと待たなければなりません。

ここならサッカーボールが飛んでくることもないし、ぬかるんでないし、きっと仲間を増やして、次の時代まで続くだろうな。たんぽぽは安心しました。

僕は風にうまく乗ることが出来ず見知らぬ土地に来てしまったけど友だちも出来、冒険もなかなかいいもんじゃない？

アッ！ アザミさん、君の友だちがこんなところで手を振ってるよ。

みんな冒険を楽しんでいたんだね！